

## 9. 富良野（北海道富良野市）

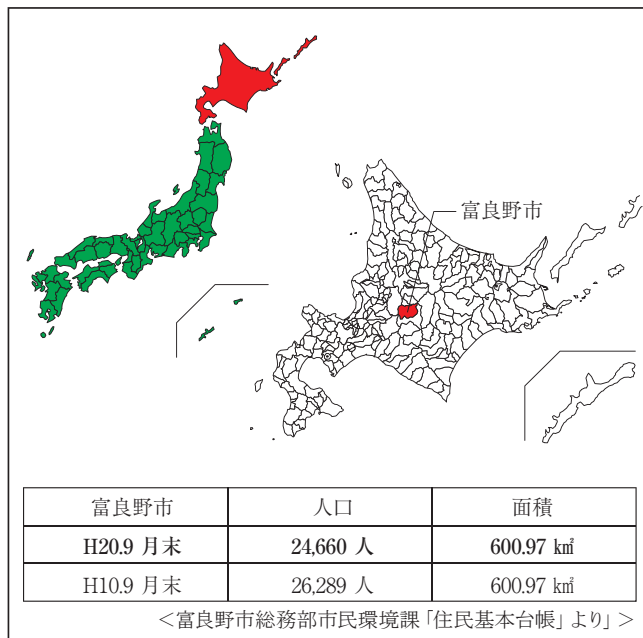
### 社会

富良野市は、北海道のほぼ中央に位置し、東南は南富良野町、西は夕張山地を挟んで芦別市、北は中富良野町、上富良野町に面しており、周辺の地域も含めて「富良野」と呼ばれている。

富良野市は、北海道のほぼ中央に位置することから、「北海道中心標」と呼ばれ、「北海道のへそ」として親しまれている。

富良野市の開拓は、明治29年（1896年）に富良野原野殖民地区画の設定が行われ、翌30年（1897年）に入植が始まったことによる。その後町村合併を経て、昭和41年（1966年）に道内29番目の市として富良野市が誕生した。

主要産業は、タマネギ、ニンジンをはじめとする農業及びラベンダーによる観光業である。また特産物として、ワイン、ブドウ果汁、チーズなどがあげられる。富良野市は、傾斜農地や石れき地等の不良農地を有効活用するために、富良野の気候条件に適したヨーロッパ系ぶどう品種からワインとブドウ果汁を製造している。特に「ふらのワイン」は、全国でも珍しい富良野市直営のワイナリーで製造されている。



### 自然

富良野市は、東に大雪山系十勝岳、西に夕張山系芦別岳がそびえ、南には千古の謎を秘めた天然林の大樹海（東京大学演習林）を有する緑豊かな環境にある。

富良野市には、石狩川水系最大の支流である空知川が流れている。空知川は十勝岳南東部を水源とし、その支流に富良野川、北1号川、無頭川、基線川、北2線川及び布札別川などがある。なお空知川の語源は、アイヌ語の「ソーラプチ・ベツ（滝がごちゃごちゃ落ちている川）」といわれている。

空知川とその支川の富良野川によって形成された富良野盆地は、大部分が扇状地性の堆積物であるが、一部泥炭地も見られる。富良野盆地では、明治30年頃から稲作が始まり、富良野川の両岸に沿って農地が広がっている。

富良野市の森林面積は、427.51 km<sup>2</sup>（43,027ha）で森林率71%である。森林の約87%が国有林で占められており、富良野市では「富良野市森林整備計画」を策定し、民有林の森林整備を推進している。

### 気候

富良野市は、年平均気温が6.1℃と冷涼で、年間降水量も983.9mmと少ないが、大雪山系十勝岳や夕張山系芦別岳の山々に囲まれた富良野盆地にあるため寒暖の差が大きく、冬は零下30℃以下の日や、夏は30℃以上の日になることもある。初雪は11月中頃から降り、3月まで続く。積雪深さは最大60

～70 cm前後である。

## 風土

富良野市は、夏になると一面に紫色のラベンダーが広がり、爽やかな香りが漂う「ふらののラベンダー」として「かおり風景100選」に選ばれている。また富良野市と旭川市を結ぶ国道237号線沿いには多くの花畑が点在し、特に美瑛町からびえい占冠村しむかつぶまでを「花人街道」と呼び、色鮮やかな花畑を楽しむことができる。

また「北の国から」のロケ地として撮影に使われた建物がそのまま残され、観光スポットになっている。

## 文化

昭和44年(1969年)、富良野工業高校の生徒によって復活された「学田三区がくでんさんく獅子舞」がある。のちに「富良野獅子舞」と改名され、現在でも受け継がれているが、もともとは学田三区に入植した農民により伝承された大型のえっちゅうししまい越中獅子舞であった。「学田三区獅子舞」として市民に親しまれていたが、後継者不足から一時中断されていた経緯がある。

ほかの主な行事として、2月上旬の「ふらのスキー祭り」、7月28～29日の「北海へその祭り」、9月21日の「ふらのワインぶどう祭り」などがある。

## 作成にあたって参考にした文献

「石狩川水系河川整備計画」 <http://www.is.hkd.mlit.go.jp/09kawazukuri/02seibikeikaku/index.html>

気象庁 <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

富良野市 <http://www.city.furano.hokkaido.jp/>

「富良野市環境基本計画」 <http://www.city.furano.hokkaido.jp/contents/ePage.asp?CONTENTNO=822>

「富良野市環境保全行動計画」 <http://www.city.furano.hokkaido.jp/contents/ePage.asp?CONTENTNO=821>

「平成20年度 富良野市の概要」 [http://www.city.furano.hokkaido.jp/Files/1/30020/attach/H20年度\\_富良野市の概要.pdf](http://www.city.furano.hokkaido.jp/Files/1/30020/attach/H20年度_富良野市の概要.pdf)

富良野物産協会 <http://www5.ocn.ne.jp/~tokusanf/index.html>

## 取り組みの概要（目的・効果など）

- ・富良野市は演劇によるまちづくりを進め、市民と協力して全国初の公設民営劇場「富良野演劇工場」を建設した。完成後は民間が運営の受け皿となり、「見る劇場」から「創る劇場」へという発想の転換を実践した日本で初の小劇場となった。
- ・脚本家・倉本聰氏を塾長とした「富良野塾」が、富良野の町中で市民が演ずる劇場づくりへと発展してまちづくりの活性化につながり、その結果、演劇の基本である身体や五感といったテーマがまちづくりの根幹に定着した。
- ・「富良野塾」の人材がベースとなり、さらに発展した形で、五感を使った環境教育事業をテーマに「NPO 法人 C.C.C 富良野自然塾」が平成 18 年に発足し、活動を展開している。
- ・「ファーム富田」をはじめとするラベンダー農家が、「かおり風景 100 選」に選定された「ふらののラベンダー」を年月を費やして作り上げてきた。「ファーム富田」には、現在も年間 100 万人の観光客が訪れている。

## 「感覚環境のまちづくり」から見た特色・魅力

- ・「富良野自然塾」は、環境の状態を「数字」で示すのではなく、五感と身体を使って感じてもらうことを通じ、地域の自然環境の特色や環境問題の本質を理解してもらうという独自の取り組みを行っている。
- ・「ファーム富田」の事例から、人の感覚を揺さぶるかおり風景である「ラベンダー畑」が独特の魅力となり、観光地に育ったプロセスを知ることができる。富良野のまちづくりや自然塾の取り組みも、こうしたイメージが土台になっている。

## 今後の課題・展望

- ・「富良野自然塾」の五感を使った環境教育の手法をモデルとして、同様の環境教育の実践が他地域にも拡大しつつある。
- ・富良野市においては、テレビドラマに頼る集客から脱却し、いかに観光業を活性化していくか、また、中心市街地の活性化の実現が課題であり、富良野市商工観光課では、市民にワークショップを通じて地域の観光ポイントを発見してもらうことを目的とした「市民観光ツアー」を計画している。

「感覚環境のまちづくり」を訪ねて-9

## レジャー施設依存の「まちづくり」から、自然のフィールドへ

### 富良野自然塾の試み

北海道・富良野市は、<sup>とちだけ</sup>十勝岳連峰と夕張山地に挟まれた富良野盆地にあり、北海道のちょうど中央に位置しているところから、北海道の「へその町」として知られている。

富良野市といえば、ラベンダー畑や「北の国から」のロケ地として全国に知られ、今でも多くの観光客を集めている。そのイメージは定着し、北海道の一大観光スポットとして人気を得てきた。だが今、新たな試みの中から、これまでとは違った新鮮なまちの魅力を創りだしていこうという動きが胎動している。

時代が変わり、現代人の価値観が多様化し変化していくなかで、これまで持続してきたまちづくりの形や中味も、変わっていくことが求められている。

20世紀型の土地開発にもとづいて造られた宿泊施設と、人気のテレビドラマに寄りかかったレジャー施設中心の観光業への依存から脱し、富良野市の未来を切り開いていこうと取り組んでいる現場を訪ねた。

富良野で、閉鎖されたゴルフコースに植樹をし、50年をかけてゴルフ場を森に還そうという試みが注目されている。

さらに、ゴルフコースに木を植えるだけに留まらず、ゴルフコースを自然環境教育のフィールドとして活用していく活動も生まれている。

「NPO法人C.C.C富良野自然塾」は、平成18年、脚本家・倉本聰氏が塾長となり、自然返還事業・環境教育事業を軸にスタート。氏が主宰する俳優やシナリオライターの養成塾「富良野塾」のOBらが中心スタッフとなり、これらのプログラムが運営されている。

現場は旧富良野プリンスホテルゴルフ場。

かつてアーノルド・パーマーによる設計で名を馳せた名門コースだった。

しかし平成17年、西武グループの経営再建のあおりを受け閉鎖。富良野自然塾はここを借りて、「6ホール分、約35ヘクタールの土地に15万本の木を植え、50年間で森に還す」という目標を掲げた。同時に、「五感」を使った環境教育のフィールドとして活用していくことが計画され、手作りの教育施設が造られた。

そのフィールドを使った体験プログラムに参加した。

足の下に、何か大きな石があるらしい。ゴツゴツと粗々しい感触だ。

少し進むと、チクチクする。小さな石が皮膚に刺さってきて痛い。ハダシの足に、刺激が加わる。しかし、視覚を遮断しているのだから、どんな道を歩いているのか、まったくわからない。

しばらくすると、草むらに入ったようだ。柔らかな草の感触に、ほっとする。目隠しをとると、周囲には林が広がっていた。

北海道・富良野西岳の麓、元ゴルフコースだっ



目隠しをして歩く「裸足の道」

た場所に作られた「裸足の道」。250メートルの道上に、おがくず、小石、草、丸太などが様々な素材が敷かれている。足の裏の感覚が鋭敏になるだけではない。視覚を遮断したままで大地を歩いていると、普段は気にも留めない日陰と日向の温度の違いに気づく。風や水のかすかな音を、鋭く聴き取ろうとしている自分がいた。

「ふだん、私たちが情報収集する時は、視覚に80%依存していて、他の感覚はあまり使っていないのです。現代人は実感を通じた理解が不足しがち。視覚に頼ってばかりいる私たちですが、目を閉ざすと、他の感覚がいきいきと立ちあがってきます。まずは十分に五感を開くこと。準備運動のようなものですね」と、富良野自然塾のフィールドディレクターである齋藤典世さんは言う。

「裸足の道」の次は、「石の地球」へ。

三層でできた地球を、実感的に理解するためのオブジェがあった。30メートル離れたところには、バスケットボールほどの月の模型も。月と地球の距離感が実感できる装置だ。

そして「46億年地球の道」と名づけられたなだらかな丘へ。



地球の歴史を辿る「46億年地球の道」

目の前に、大きな風景が広がっている。整えられた傾斜と曲線から、かつてここがゴルフコースだったことが、はっきりとわかる。「地球の最初は、まっ赤なマグマの海でした」と齋藤氏のフィールド講義は始まった。

周囲には赤く塗られた石が重なる。1メートル進むごとに1,000万年が経過し、景観が変わっていく。地球が高熱化と凍結を繰り返し、生物が誕生、スーパーブルームなどの試練を経てほ乳類が出現、原人そして人類の出現——。その長い時の経過を、460メートルを辿る中で実感してみよう、という斬新な試みだ。

## 環境教育の現場は舞台に通じる

人類の誕生は、ゴール手前のたった2センチ（20万年前）の場所だった。地球に比べて、私たち人間がいかに「ちっぽけ」な存在か。実感として、痛感させられる仕掛けだ。

「46億年という数字だけでは分からなかった意味を、五感と身体を使って感じていただき、理解すること。そうでなければ、環境問題の本質は掴めないはずです」

沿道に並ぶ数々のオブジェや表現方法は、すべて倉本氏の案を元にして、スタッフたちが作り上げてきたものだ。

「やりとりの調子は、参加された方によって変わるんです。舞台上の感覚に通じますよ」と齋藤氏。実は彼も、俳優を目指して富良野塾で修行したOBだ。

実感を通じた環境問題の理解を経て、いよいよ植樹へ。

種から育てた苗や山採りの苗を一本、一本、土に植え込む。参加者はまず、「カミネッコン」の組み立てから始める。再生紙の段ボール製「カミネッコン」は六角形の苗木ポット。北海道大学名誉教授の東三郎氏が考案した。弱い苗木を守り、数年で土に還る。「カミネッコン」に土と苗を入れ、さらにそれをゴルフ場に植樹していく。地面は固く締まっていて、土を掘るのは実に大変な作業だ。

土を掘り返そうとしても、簡単にはスコップが入らない。地盤のあまりの固さに驚く。この固さに

は理由があった。ゴルフコースを作る際、山の斜面を削り取り、人工的に高低差のある平地を作った。そこで本来の地表面でない、地層の内部が表面に露出したため、固くしまっているのだ。

「ゴルフ場」という人工施設を自然の森に還すことの大変さを、土にスコップを入れる作業によって思い知らされる。「裸足の道」も「地球の道」も興味深かったが、腰が痛くなるほど力を込めてスコップを突き刺した瞬間の、直感的でリアルな感覚が忘れられない。

「一本の木すら、植えるのはたいへんなこと。この体験が、参加者の身近な場所で自然環境について考えるきっかけとなり、何かの行動につながってくれたら嬉しい」と齋藤氏。背後には、植樹された苗木が雄大に広がっていた。

「富良野自然塾」にはユニークな体験プログラムが複数あるが、残念ながらフィールドは冬の時期、雪に閉ざされてしまう。そこでもう一つ、通年体験可能な新しい施設が誕生した。「闇の教室」だ。光のない世界でさまざまな体験をする、日本初の屋内常設スペース。「五感のうち視覚を完全に封じることによって、視覚以外の感覚が蘇る不思議で感動的な体験」を提供することを目的に、ホテル内の一室を改造して造られた。「闇と光」の意味を考え、文明社会を見つめ直すねらいも込められている。

これまでに全国各地から自然体験プログラムに参加した人は約7,500名、植樹は27,000本を超えた。ここで学んだ手法をもとに、愛媛県や京都府など他の地域でも、「五感」を使った同様の環境教育のフィールドが広がっていく予定だという。

自分が暮らしている地域社会やまちの魅力について、そこに住む人たちは、果たしてどれくらい気づいているのだろうか。まちの魅力や可能性を再発見していこうという試みは、様々な地域で取組まれるようになってきたが、「富良野自然塾」の体験プログラムには、その方法を作り上げていくためのヒントが含まれていないだろうか。

「五感」を使って、もう一度自分の暮らしている「まち」を直接に感じながら観察してみると、これまで気づけなかった魅力が見えてくる。富良野では、ホテルのゴルフコースの中に、かつてあった自然の森の豊かさと環境教育のフィールドを発見した。同じように多くのまちには、それぞれのまちに固有な魅力や感動する要素が、いくつも隠れているはずだ。五感は、そのことを実感として気づかせてくれるだろう。

## 土台を築いた「ファーム富田」

こうした環境教育プログラムへの取り組みが生まれてきたのも、これまで富良野という地域一帯が、土地の風土や自然を大切にしてきたという伝統があったからだろう。

「地域ブランド調査」の結果によると、富良野は平成18年6位、平成19年は8位にランクインしている。魅力的な町についての調査では、常にトップレベルに評価され続けている。ということは富良野が、自然や環境、食といった面で、全国から十分に高い評価がなされてきたことを示している。

「富良野」と聞けば、一連のテレビドラマを思い浮かべる人も多いはずだ。

昭和59年（1984年）、脚本家・倉本聰氏は、俳優やシナリオライターを養成する「富良野塾」を



ゴルフ場に苗木ポットを植える

北海道の原野でスタートさせた。その後、倉本氏の脚本による「北の国から」等のテレビロケ現場にもなり話題を集めた。ドラマの舞台は富良野市の麓郷で、現地に作った複数のロケセットは今も保存され、平成7年に観光客が200万人を突破、一時は250万人まで増加した。

テレビドラマで富良野が注目を集めたのは、必ずしも有名な俳優や脚本家の力だけではないはずだ。独自の自然風景、植生や空の色、水の手触り、花々の香り、食といった五感に訴えかける感覚的な豊かさが視聴者に伝えられた結果、足を運びたいという気持ちがかき立てられたのではないだろうか。

その一つに、ラベンダー畑がある。

平成13年、環境省が全国各地の自然や生活、文化に根ざした香りのある地域を「残したいかおり風景」として募集したところ、600件の応募があった。その中から100件が「かおり風景100選」として選定された。100選の一覧表を見ると、まず最初に出てくるのが北海道「ふらののラベンダー」だ。

雄大な山々を背景に、紫色の花が咲きそろう丘を見た瞬間、ラベンダーのほのかな香りを思い浮かべる人も多いことだろう。

北海道のほぼ中央部、雄峰十勝岳の山麓が東北に広がる一帯。富良野盆地は東京23区がすっぽり入るほど広い。民営、町営のラベンダー畑が点在する、観光の人気スポットだ。その先駆的存在が「ファーム富田」だ。

ファーム富田の成り立ちには、この土地固有の歴史が垣間見える。

会長の富田忠雄氏の父は、開拓者として本州から北海道へ入植した。昭和33年（1958年）、息子の忠雄氏が、香料用としてのラベンダー栽培を開始。

「昭和50年（1975年）、ラベンダー生産はピークを迎えました。しかし順風満帆とはいかず、貿易自由化や合成香料が主流になったことで、国産のラベンダー需要は急激に衰退していったのです。近隣一帯のラベンダー栽培農家は次々に消えていき、結局、ここ一軒となってしまいました」（図8）と、原田健一取締役統括部長。



ラベンダーが広がる「ファーム富田」

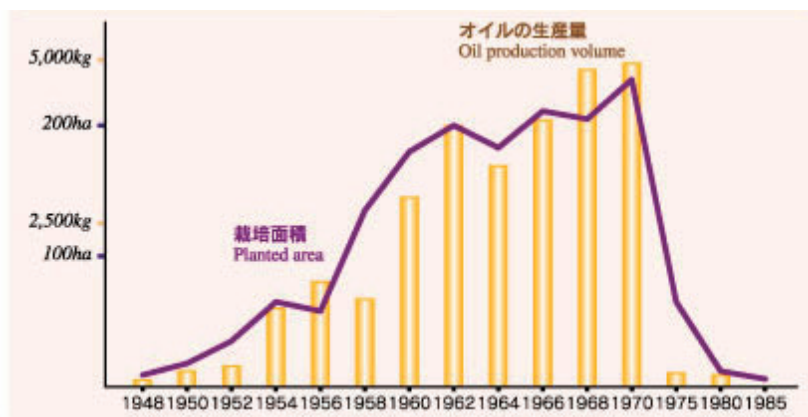


図8 北海道のラベンダーオイル生産量と栽培面積\*<sup>26</sup>

\* 26 ファーム富田

ラベンダー農家の最後の一軒となったファーム富田。しかし、それでもラベンダー作りをやめなかったのは、富田氏が最初にラベンダー畑を目にした時の美しい風景と印象的な香りを忘れられなかったからだ、という。

しかし経営的な困難は続いた。もはやラベンダー栽培の継続は難しい、と判断した矢先、偶然にも日本国有鉄道（当時）のカレンダーに畑の写真が使われることに。その独特の光景が全国で話題を集めることになる。

「ラベンダーの色や畑の美しい光景に惹かれたと、カメラマンが畑に次々にやってくるようになりました。もうラベンダー生産は採算がとれないのでやめるしかない、と話をする、どうか存続してくれ、この風景を残してほしい、という声がたくさん寄せられたのです」

その後も、追い風と言えるような出来事が続く。昭和56年（1981年）、倉本聰氏のテレビドラマ「北の国から」が大ヒットし、そのロケ地としてラベンダー畑が注目を集めることになった。以後、ドラマは20年間続き、ロケ地を見ようと多くの観光客が押し寄せた。町営・民営の畑も増え、しだいに「富良野＝ラベンダー」というイメージが浸透し、ラベンダーは「上富良野町の花」として登録された。

「ファーム富田」では香料だけでなく、ドライフラワーやポプリなどの独自商品を開発し販売している。廃業寸前から見事に復活を遂げ、今では年間100万人の来訪者がある、という。

だが、実は「ファーム富田」は入場無料だ。駐車場やトイレなどの整備も自前で行っている。

「ラベンダーが創り出す美しい風景を、自分たちだけで楽しむのはもったいない、という富田の思いから、今も入場無料という方針を続けています」

こうした経営姿勢を支えてきたのは、「ラベンダーをいつまでも大切に育て、ここにしかない景観や雰囲気大切に維持していきたい」という純粋な気持だったという。観光地としての成功は、マーケティング的な仕掛けや広告戦略から生まれたわけではなかった。ラベンダーという花が創り出す「かおり風景」もその一つだったのだ。

「ラベンダー栽培を継続してきた富田に対して、香水の国フランス・オートプロバンスから『ラベンダーナイト』の称号も贈られました」と原田氏は胸を張る。

「富良野」という地名も、匂いに関係しているといわれている。アイヌ語のフーラ・ヌイは「におう泥土」を意味し、十勝岳から流れる硫黄臭の川が泥炭地帯を形成したためこの名がつけられた。

「ファーム富田」は、人の感覚を揺さぶる個性的な風景や植物たちが独特の魅力となり、観光地となって育っていったという事例だろう。こうした先行事例が、北海道の自然とともに富良野のイメージを形成していった。富良野のまちづくりや自然塾の取り組みは、こうした自然環境イメージが土台になったからからこそ、順調に進んでいくことができたのではないだろうか。

## NPO法人と行政と市民の連携

今や北海道有数の観光拠点となり、他の地域がうらやむような文化的な資源もあると思われがちな富良野。だが、「地元住民の意識には、温度差がある」と聞かされた。

「富良野は、そもそも農作物の生産地でした。『北の国から』の放映で、突然、夏に観光客がやってくるようになりましたが、それまで観光といってもせいぜい冬のスキーだけ。今も、外から勝手に人がくる、という意識が依然として強いです。住んでいる人のまちづくりへの意識をどう変えていけるのかが、これからの課題でしょう」と、富良野国際観光センターの齋藤信道センター長は言う。

農業中心のまちから、観光地への意識の転換。さらに、テレビドラマに頼る集客だけではなく、どのように地元住民が中心となってまちを活性化していくかが、今後の課題になるだろうという声は、



あちこちで聞かれた。

「私たちは、『北の国から』がブームになった時、すでにポスト倉本を考えなければ、という意識を持っていました。悪い意味ではなくて、たとえ倉本さんいなくなっても地元民が力を合わせて富良野を成長させ、まちの魅力を膨らませていくことができなければいけないと思ったのです」と、ふらのまちづくり会社の西本伸顕社長は振り返る。

興味深かったのは、ドラマ『北の国から』のオンエアが、外部の人に富良野の魅力を発信しただけではなかった、という点だった。

「地元の人々が、富良野という土地の魅力を、再確認する契機となったんです。ドラマ放映後、自分たちのまちは外から見るとこんな風に見えるのか、自治体としての規模は小さくても、こんなにも独自の魅力がたくさんあるんだと気づいたのです。その後は、演劇によるまちの活性化が地元の市民によって始まり、平成11年日本初のNPO法人『ふらの演劇工房』が設立されました。翌年、全国初の公設民営劇場『富良野演劇工場』が誕生。毎年、市民演劇祭が開かれるなど、今やコミュニティーの重要な拠点になっています。演劇という文化が、人口2万5千人の小さな地方都市・富良野を盛り上げたのです」

多くのまちで共通して指摘される「住んでいる人自身が地元の魅力を再発見する」という一番難しい作業が、富良野の場合、テレビドラマをきっかけに始まった。地元の人びとは、テレビドラマに登場した富良野の姿を見て、初めてその魅力を発見したというのだ。

まちの魅力を地元民自身が発見していくという積み重ねの中から、映画館もない小さなまちで、演劇によるまちおこしが実現していくことになった。市民は劇を「鑑賞」するだけでなく、自分たちで「演じる」楽しみを知っていった。道路や施設といったハードウェアに金銭を投じるだけでなく、「演劇」という文化的なソフトウェアを使って作り上げていくまちづくりが、富良野ではいきいきと実践されている。

今後の課題は、富良野中心市街地の活性化だという。

ドラマのロケ現場やラベンダー畑は郊外に点在していて、車で回るしかない。演劇工場も市街地からは車で5分ほどかかる。駅前の中心市街地は人通りも少なく、寂しいままだ。

「なんとか観光客にまちの中を回遊していただきたいのです。駅のすぐ脇に『北の国から資料館』を有志の一人が自前でオープンさせました。さらに今、ふらのまちづくり会社では、地元の農産物や素材を活かした、食文化の発信施設を企画中です。まちの玄関口として、多くの人に立ち寄ってほしい」と西本氏。

「車で観光スポットを巡り、街中はスルーしてしまう観光客に、どうやって長い時間、滞在してもらえるかが、これからの課題です。宿泊という視点からも、自然塾のような体験プログラムはとても意義深いものだと思います」と、富良野市商工観光課の志賀光さんは言う。NPO法人の活動と行政と市民とが、ますます連携していくことが求められている。

「リタイアした世代の人たちが自然塾の研修を受けて、スタッフとなる動きが出てきています。そうなれば、より広く外へプログラムをアピールできますし、環境教育ツアーとしてたくさんの人を受け入れることができる体制が整う」と齋藤氏。

「団塊の世代に長く滞在してもらおうプログラムを今後準備していきたい」と志賀氏。

「ぜひ富良野で生活してもらおう楽しみを知っていただきたい。非日常的な観光を提供するだけでなく、移住・長期滞在していただきたいと考えています。そのための生活ガイドブックを作っています」また、市の商工観光課では、今年度内に市民による観光ツアーも企画している。

「市民自身が地域を自分たちで検証し、ワークショップをしながら観光ポイントを発見することができればと思い、企画しました。お金をかけてハコモノを建設するのではなくて、すでにある NPO 法人の活動や自然環境の中から、富良野の観光資源を発見したい。それを通じて、さらにまちの魅力を創出していく人材を育てていければと思います」

日本でも有数の観光地として名の通った富良野。だが今、その富良野で、旧来の観光資源への依存を転換していく、新たなまちづくりのためのソフトウェアづくりが、NPO 法人と行政と市民との連携をふまえて生まれようとしている。

そのソフトウェアづくりの素材として活用されていたのが、「感覚／五感」だった。

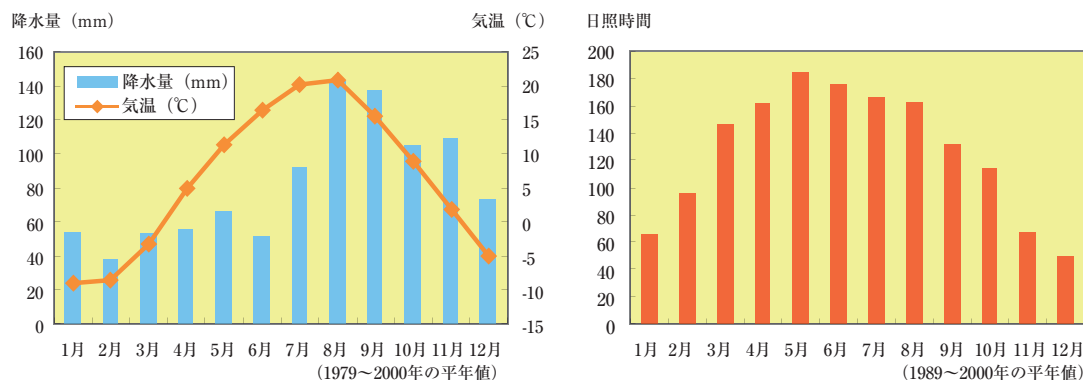
富良野自然塾は、ゴルフコースの中に、「環境教育の素材」や「自然環境の豊かさ」を再発見していく道具として、「五感」を上手に取り込んでいる。富良野の豊かさを、もう一度、直接感じ観察することで、気づかなかったたくさんの観光資源を発見しようと、市民による観光ツアーも行われる予定だ。

富良野だけではないはずだ。全国津々浦々のまちにも、それぞれ固有な魅力や歴史と風土に根ざした伝統的な遺産が、いくつも隠れているのではないだろうか。

「五感／感覚」を道具に、「まち」の散策を重ねていけば、「まちづくり」のための素材や人材は必ず見つかるだろう。全国各地のまちづくりが転換を模索しようとする時、五感・感覚を使って新たな道を切り開きつつある富良野の事例から学ぶことは、多いのではないだろうか。

## 参考資料

### 気温・降水量・日照時間



<気象庁データより作成>

### 大気状況

測定の実施なし

### 水質状況

生物化学的酸素要求量（BOD）測定値

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
富良野川 (mg/l)	0.9	0.8	0.9	-	2.5	1.1	1.2	1.9	1.8	1.4
ペベルイ川 (mg/l)	2.0	1.2	1.1	-	2.5	1.0	1.2	2.2	1.6	1.3
無頭川 (mg/l)	1.9	1.8	1.8	-	12.0	4.6	5.8	3.3	2.7	4.6
北2線川 (mg/l)	0.6	1.1	0.9	-	11.0	3.2	2.3	1.9	2.0	2.2
8線川 (mg/l)	0.5	0.6	0.5	-	2.8	1.1	1.0	2.0	1.7	1.0

H13は未検査

<富良野市総務部市民環境課>

### 公害苦情

(件数)

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
大気汚染	-	-	-	-	-	0	0	0	0	2
水質汚濁	-	-	-	-	-	0	0	0	0	4
騒音	-	-	-	-	-	0	0	0	0	1
振動	-	-	-	-	-	0	0	0	0	1
悪臭	-	-	-	-	-	0	0	0	0	4
土壌汚染	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0
地盤沈下	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0
その他	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0
総数	-	-	-	-	-	0	0	0	0	12

H10~14の集計データなし

<富良野市総務部市民環境課>

